

じふにばんしんろくじー 二〇一六年版



うろこアンソロジー二〇一六年版 目次

夢	南原充士	3
管	—— 豊み重なるこ無礼の数々	
	三井喬子	5
耳の家族	高田昭子	9
オペラ・エクロージュ『同級生夫婦』 <small>ケイファアジヤン</small>	第2回	
桂花醬	鵜飼千代子	20
	有働薫	12
Night Jewels	夜の宝石	
	南川優子	23
今年の藪	清水鱗造	25
願い、恋心はかなく(歌曲、習作)	富澤守治	28

夢

南原充士

シンボリックな鬱屈にとらわれて飲めない酒をあおると
たちまち抗しようのない睡魔に襲われベッドに倒れ込んだ
落ち込んでいくベクトルのいくつもの成分が入れ替わり立ち代り
悪夢を生み出したとしても夢見る者にはどうしようもない
するとひとりの女の顔が鮮明に浮かび上がってきて
長い髪をかきあげて上目遣いにこちらを見るので
からだに触ろうとしたところで目が覚めた
その女は女優顔で男を惹きつけずにはおかない雰囲気を持ち
幼い娘を育てながら自分の才覚を伸ばしていたが
精神の不安定が他人と長く付き合うことを難しくしていた
彼女への思いは隠しておいたしなにとつ秘密も作らなかったのに

なぜ夢に現れてきてこちらを誘おうとしたのだろうか

ほとんどの夢は忘れてしまうのにその夢はなかなか忘れられない

こちらの気持ちの中で彼女は復活しこちらを悩まし続ける

もちろん彼女にはなんの責任も関わりもなく別々の時間が過ぎていく

もしこちらが夢をひきちぎれば彼女の心は痛むだろうか

もし彼女に連絡をとろうと動きはじめればどんな未来が待っているだろうか

避けられない夢の記憶が理不尽にこちらを戸惑わせる

管 —— 曇み重なるご無礼の数々

三井喬子

今日び

積年のヘドロの所為で 管というものは詰まりがち

もうブラシでは落ちない うっ

落ちない過去の罪悪 ううっ！

こうなれば…

と鉄ベラでこそげるが

薬の方がましでやんしょう

と 嘔かれ

強力洗剤に漂白剤 熱と衝撃

でも何とかなる筈もなく 笑劇である
積年の怠慢に慙愧耐え難く
伏してお詫びを

と 頑なに言いつつ
管を叩いたのでありました

うっ、

赤黒い決壊！

来るべきものが来た 北枕

行くものが行った 南へ 船で

帆を張り 面舵いっぱい！

取舵 後悔いっぱい！

残るしかないヘドロの塊

死火の劫末 畳み重なるご無礼の数々

座り込んで

じっくり味わう生の残滓

おお、

わたしたちが わたしたちの形を持っていた日々のために
一言遺言のようなものを

と 頭を揺らす

ゆらゆら揺れる滞留水分

の あっし

ありや、

∴ あっしやまだ生きている！

ここから先は 行っではいけない

青竹真一文字の境界の

先の

晒された日々

境界は時に揺らめくが

ヘドロは重たい

四苦は疾駆して

榜示は既にして茫々の山野にある

無理難題を

ふっかけ続けた報いでござる 頭が高い

神よ仏よ

白花の束に髪を重ねて

千人の子を抱き

火を焚き

入らずの森に入りたし今宵

耳の家族

高田昭子

遠耳のおとうさんの耳の奥には
地獄の扉がある

うっかり開いてしまうと

おとうさんはムツツリとした顔になる

車のクラクションは聴こえない

自転車のベルも聴こえない

天国のような地獄の道を

トボトボと散歩しているおとうさん

世界は少しだけやさしくできているらしい

おかあさんの耳は空耳

死んだひとの声ばかり聴こえている

「おとうさま、おかあさま、

永いことお会いしていませんが お元気ですか
ぶらんこのところまでお迎えにきてください。」

晴れた秋空の

白い雲の座布団の上にならっしゃる

おとうさまとおかあさまは

透き通った立派な耳をお持ちです

「もうすぐ会えますよ。」

わたくしは死んだふりの上手な貝の耳

時には

悪魔のような秘め事をゴクンと飲みこんで

気圧の境目を通過中

最も切実なわたくしの声は
どなたの耳も通過してしまい
喉元に戻ってくる
飲み込む・こ・と・ば

オペラ・エクローグ 『同級生夫婦』 第2回

有働薫

第1幕 第2場

(夜中。アントワネットのベッド。ナイトキャップのマリーが半身を起こしている。真つ青な顔、皮膚は削げ骸骨じみて闇に向かつて)

アントワネット…さあ、はやく、はやく。はやくおいで！ さあ、はやく、はやく！

モーツアルト…(やや太り気味。左のドアから、燭台を持って入ってくる) どうしたの、またうなされているんだね、かわいそうに……

アントワネット…(見間違えて) はやく、はやく……ここへおいで、わたしのひぎに……(何かを掻き抱く仕草) 返して、返して……

モーツアルト…(アントワネットの脇に腰かけ、肩に手をやる) さあ、おやすみ、何も心配しないで、何も考えてはだめ、おやすみ、おやすみ、またきつと会えるよ、きつと、きつ

と…

(つぶやく) 昼間はあんなに元気が良かったのに、かわいいそうに…

きみのほうがずっとずっと過酷な目にあつた、ぼくもひどい扱いを受けたが、死のぎりぎりまで音楽があつた…ぼくはぎりぎりまで音楽だけをみていた。音楽がぼくの意識をその手のひらにのせて揺すってくれた。きみだって、きみひとりのことであれば…

きみがシェーンブルンの広間のゆかで滑つたぼくに駆け寄つて助け起こしてくれたとき、歴史家はそんなきみを、王家の人格としては失格だと決め付けたが、それは間違いだ。

「大きくなつたらお嫁さんにしてあげる」と幼いぼくの唇がおもわず叫んだのは、6歳の人間同士の存在の画期的な認め合いだった。作り話だろうとかまわないさ、ロミオとジュリエットのように内部に火を持っている人間同士にとつぜんアークが走ることが起こることがあるのさ(この台詞のあいだにアントワネットは眠りにつく。モーツァルトは上掛けを掛け、枕を直して、灯をもって退場、やがて隣室でピアノの音…：ロンドイ短調K 511)

(左上に10歳の少年の姿、やせ衰えた真白な…)

(暗転 暗闇の中で、歌)

《♪今日はモーツァルトブルーの空

へあの子は名前負けしよらすもんな》

母はときに残酷なコトバを口にする

母上さま六歳の夏のとある真昼からあなたにこころをひらくことはなかった

わたしだって名前負けです

でも棺の中の兄は

美しい顔をしていた

紫や白やピンクのカーネーションやバラがよく似合った

火があなたを無に運んでいく寸前

三五歳の音楽家の網膜に最後に映った

秋の空の色がやはりあなたにいちばん似合った

棺にもはいらず

穴の中で腐って行く

多くの同胞と腐乱して混じり合った

しかしそんなことは瞬時のこと

あなたたちの生はその何万倍も永い♪》

モーツァルト…（居間の暗闇の中でスポットを浴びて）美しい名前をもらって
美しい音楽をつくった

きみのルダンゴトドレスの肖像画とどっちが残酷か
うつくしいとかうつくしくないとか

象徴とされることの無残があるだけだ

アントワネット…（ベッドの中で、うわごと）ぼうや——ぼうや

（暗転）

第1幕 第3場

（モーツァルトが昼間書いた2通の手紙の名宛人①）

（北のとある街のテークラの家。質素な居間、職工風の青年と初老の母が朝の食卓についている。冬の明るい晴れた朝。町並みが窓から見える。教会の尖塔も。スープを飲み終わり、

エプロンを取り、上着を着る青年。母のひたいにキスして、戸口に向かう)

青年…行ってきました…：今日は帰りが遅くなる、たぶん。母さん先に休んでいて。組合の飲み会があるんだ、夏に催されるお祭りの相談と、教会の裏庭の墓地を拡げる計画のことで牧師さんから説明がある…：母と子は肩を並べて戸口を出、母は子を見送る。

居間に戻り、食卓を片付ける。食器洗い、台所の水汲み、洗濯、床の掃除…：などの家事。開け放された窓、小鳥の声。(歌曲「すみれ」が小さく聞こえる)

(エプロンと頭巾を脱ぎ、窓のそばの椅子に坐る)

テークラ…(ブラウスの胸ポケットから折りたたんだ紙を取り出して、少し開く、それから呟くように) お手紙ありがとう、懐かしいちゃん…：あの頃、まるで大勝利の將軍を迎えるように、夢中だった、こんな夢の王子のようなイトコがわたしにあるなんて！ ああ、なんて夢のような時間だったことだろう、あの若い日々が今のわたしの生きる糧、誰がなんと言おうが、あんな素晴らしい日々をわたしは臆せずに突き進んだ、まるで始めて従軍する初年兵のように！ 誰がなんと言おうが、あの日々はわたしの宝物、わたしのダイヤモンド、たとえば王妃の位だつて敵いやしない。教会にオルガンを弾きに行つた日、今まで眠りこけていたあの機械が、とつぜん目を覚まして、まるで洪水でもとつぜん襲つて来たかのような…：あれは奇蹟の日だった！あの最高に輝かしい日々の記憶の

ために、わたしはいま長い老いの日々を送っている、幸せに、今でも心ときめいて！
生れてきたことの最高の喜びを私たちはいっしょに掴んだ！ わたしたちには勇気が
あった、私たちは晴れた空の中の鳥たちのように素直だった！ 生れてきた幸せを、そ
れは永く続くことはなかったけれど、それでいいんだ、あれで充分なのだ。こんな恵ま
れた生きる喜びを持ったのだもの。お手紙ありがとう、ウォルフ兄さん！

(テークラおばあさんは窓の外を眺め続ける)

(暗転)

第1幕 第4場

(モーツァルトが昼間書いた手紙の名宛人②)

(舞台は暗闇。モーツァルトの声で) ストックホルムの野獣性が爆発する——貴族対民衆
の根源的本質的憎悪が年老いたフェルセン元帥の上に。18年後、6月20日。時代は本質
的に長い支配階級を転換させる。信義の時代から経済の時代へ。1810年、フェルセ
ン惨殺。

(暗転)

第1幕 第5場

(ドレスデン、1789年4月 ケルナー・ハウス

モーツァルトがピアノを弾いている。この家の令嬢ドリス・ストックが入ってくる。

近づき、しかし弾くのをやめさせない。軽く目礼して、離れたソファで静かに聴いている。

ややあつてモーツァルトがピアノを離れ、ドリスに話しかける)

モーツァルト…美しいお嬢さん、ぼくのピアノお気に召しましたか？

ドリス…まあ、モーツァルトさんですね、あの有名な。：『フィガロの結婚』、不思議なオペラですわね、少し心が痛みますけど……

モーツァルト…ありがとうございます、おかげさまでウィーンでも評判でした…とりわけ皇女さま、ご令嬢がたが拍手してくださいましたよ。

(ドリスの回想、70歳、モーツァルト没後40年、白髪のドリス、バックに映画「ロミオとジュリエットのテーマ A time for us」)

ドリス…おぼえています……

第1幕終り

(
A
t
t
i
m
e
f
o
r
u
s
が
鳴
り
続
け
る
)

ケイファジヤン
桂花醬

鶉飼千代子

金木屋の花を瓶に入れ　ホワイトリカーを注ぐ

ひと月ほどして　香りも色も酒に移った頃

金木屋の花を引き上げる

その酒は　甘い香りをたぎらせ　口に含むとふくよかな広がりを持つものの
まだ角の
ある若い味だ

時間が育ててくれるのをしばし待とう

焼酎漬けの花は変色せず

鮮やかなオレンジ色のままだった

捨ててしまうのは切なく淋しい

そうだ 蜜煮にしよう

グラニュー糖に金木犀のお酒を少し入れ
熱してシロップを作る

すっかり砂糖が溶けたところに 焼酎漬けの金木犀の花を入れ
少し火にかけてたら火を止め 自然に冷めるまで待つ

肉厚の花びらにほんのり甘味が入る

そのシロップに ほんのちよっぴり塩を入れる

そこんじよそこらのジャムじゃない

ジャムに塩は入れないもの

香りはあまり感じないが ひと匙すくい口に含むと

プチプチと金木犀の花が口の中で弾ける
いや、プチプチと噛みながら 舌の上で味わっている

ケイファジヤン
桂花醬

中国では塩漬けの金木犀の花を塩抜きし
蜜煮したものをそう呼ぶという

我家の蜜煮は 後から塩を少々
金木犀の花善哉になった

2016年12月28日

Night Jewels 夜の宝石

南川優子

ねむる前

物言わぬベッドに

ひとつかみの宝石をばらまいて

そこに

身を沈める

深く 落ちていくほど

ダイヤモンドは泡立ち

サファイアは波打ち

ルビーは熟れる

けれどわたしは

あなたたちをぜったい

光らせない

闇の奥で輝くと

きらめきがわたしの体を

がびょうのように

刺すから

* Dulux の色連作より。 <https://www.duluxtradepaintexpert.co.uk/colour/00nn-62000> [00NN-62000 | Colours | Dulux Trade]

今年の藪

清水鱗造

遠くに墨流しの雲が湧き出している

強い風が渦巻く野を歩くと

帽子が飛ばされそうで

手近な藪に出合おうと

かき分けてもぐり込みたくなる

植物の息のおいが満ちている野の部屋で

ひそかにつぐみたくなる

動物のねぐらや

灌木間の迷路が生成された

痕跡のある藪

藪の底の地面には

いちめんに

昆虫の行き来する回路が残っている

横になって

穂のある草の塊を抱いて目をつぶると

やがて

藪の外の墨流しの暗い空を

西に向かって泳いでいくクジラの泳ぐ音や

地平線まで延々と続く

人たちの行列の足音などが

耳の奥に聞こえてくる

願い、恋心はかなく（歌曲、習作）

富澤守治

思えば、あまりにたやすく愛は生まれ死んでいくもの
どれほどか、何度も繰り返してこころに問い詰め
それは自分ひとりにだけ起こったでもないようにと
問いかけ問い戻している

誰でも悩み苦しむ、またときめいたことをたくさん思い出すもの
愛はそんなもの、それほどのもの
ときめいて笑い合い楽しむ時間はほんの少しだけ
いつも短い間だけ

恋人よ、恋を歌うのであれば、その短い時間を逃してはならない

必死で恋心に酔って、狂ったまま私の胸のなかに来ておくれ
もう十分に悩み、恋焦がれた男のところがここにあるのだから
私を恋する人が私が愛するひとになっておくれ

確かあの日、あなたは私の胸元で目を伏せていた

その場では尊大に振る舞うのも、それは私が男であるから
満ち溢れていたあたたかきもの、春の日の宵のいぎない

あのかぜは いまも流れているものか

ふたり、みすばらしい姿も愛の形か

あるいは幽かそけきものか、それでよい